

講演

広島大学における情報図書館の歩み

鳴海 元

一、五十年史の意義

ご紹介に預かりました鳴海でございます。私は広島大学に二十年ほど勤めさせて頂きました。私にとって広島大学というのは、いろいろな意味で育てて頂いた大学でございます。今日お話し申し上げたいことは、実は普段、親しい方にはエピソード的話をしてきたようなこととでございますので、五十周年の歴史を編纂されている方々にとっては、どのくらい御参考になるか分かりません。しかし、これはもちろん私個人というよりは、むしろ広島大学の歴史の中の一コマとして、いろいろ援助をして頂いた方々に感謝の気持ちを込めて、この報告をさせて頂きたいと思っております。

そこで、五十年史の意義ということを最初に申し上げようと思えます。五十年史を編纂されるに当たって、このことはもう十分お考えになつておられるとは思いますが、それに関する私の一つの見解といつたら大袈裟ですが、所見ないし体験を述べさせて頂きたいと思えます。本来、ユニバーシティというのは総合大学を指すわけで、ご承知の

ように、ヨーロッパでは昔は神学、法学、医学から成り立っています。哲学は基礎学として存在したのですから、今日の立場からすると四学部ということになるかもしれません。初期の日本の大学は、はじめ十九世紀後半のヨーロッパの大学の形態を範としてきたわけですから、一般にそこから大学が出発したという考えもあると思います。

これに関して、私がヨーロッパの大学に関係した人達との交わりの中で得たことがあります。欧州最古のボローニャの大学は法学部から出発したと言われていますが、医学部も後で加わったようですね。それが創立九百年という年に、実は私の親しい法学部の友人で、その創立九百年祭の式典に出席して来たという人がいました。とにかく、九百年（一〇八八年創設）という歴史があるわけで、立派な記念誌をもらわれたようですが、その方が間もなく亡くなられたものですから、残念ながらその記念誌の内容について伺う機会はありませんでした。それからハイデルベルクの大学、これがちょうど一九八六年に六百年祭をやっているのです。実はその四年前に原子物理学会国際会議を日本で開いて欲しいという強い要請が国際組織委員会でありました。

オリンピックの開催地の話とは全く別で、日本でその会議を開催することを提案したことは一度もありませんでしたが、国際組織委員会、日本からの委員として出席した私が一人で決定できる事ではないからと言いましたら、隣の部屋に電話があるから、とにかくかかるべき人と相談して是非とも了解をして欲しいということでした。それでやむなく引き受けざるを得ないという状況になり、その一九八六年に日本で第十回原子物理学国際会議というのを開いたわけです。その時に、たまたま物理学会での友人がハイデルベルク大学の学長になったのですが、この方も非常に親日的な人で、これを機会に日本文化に関する研究センターといったか講座といったか、ちよつと忘れかけたけれども、それを開設したということでした。どうして特にその時、日本研究ということに注目されたのか分りませんが、これはやはり六百年祭という時期にですね、新しい学問分野といいますが、とにかく日本研究の講座を新しく作るということとその機会にしたということなんです。学問研究という立場からしますと、大学としてそういう機会に新しい専門分野を開くのも、一つのあり方ではなからうかという気が致します。

その一九八六年の国際会議の際に、実はその年に出版されたハイデルベルク大学の創立六百年記念誌を彼がわざわざ持ってきてくれました。二、三部持ってこられて、私もそれを一部を頂きました。帰るのは大変だったんですが、後でまた何冊か送ってもらったりしました。その記念誌が広島大学に届いているかどうかを、さつき調べて頂きましたけれども、どうも届いていないらしいのです。それで五十

年史編纂の資料の一つとして、後ほど図書館に寄贈したいと思います。そんなことで、記念誌の編纂と同時に、大学として新しい学問分野を開く、そういうことが歴史を作り上げていく上に非常に重要ではなからうかと考え、一言コメントを申し上げた次第です。

日本の大学の歴史を顧みますと、明治初期のヨーロッパの大学は別として、日本ではやはり単科大学として出発をしているのです。東京大学も法学、医学、工学などの単科大学を集め一八七七年に開校しています。単科大学の集合として学部制度がその後で出来上がっているのです。それで、帝国大学令が出たのは一八八六年ですから、大学というか総合大学としては、内容は別として、ユニバーシティであったことは確かであろうかと思いますが、単科大学の集合であったという点が、ヨーロッパと異なる重要な相違点だったと思います。後に学部制という形で出発をしているのです。それから京都大学が一八九七年、これも理工科大学として開学していますね。その後、いわゆる旧帝国大学というのが逐次できましたけれども、それにしても東北大、九大、北大なども、いわゆる幾つかの単科大学の集合として出来てきました。そして正規の単科大学令というのが一九二九年で、その時に文理科大学が東京と広島に置かれ、その意味で今年がちょうど創立七十周年に当たっているのです。その他に工業大学が東京に、商業大学が東京と神戸に、また医科大学というのも幾つか出来てきましたですね。それらが全て一九二九年に発足していますから、いずれもこれらは単科大学令が出されたという意味からすれば、今年で創立七十周年になるといふわけです。

戦後、アメリカの大学制度に基づいた新制大学が出発して、五十年ということになっておりますけれども、古い大学の東大や京大でも、単科大学として出発した時点を創立の年と考えて、京大では百周年というのを一昨年ぐらに行っていました。そういう歴史がございまして、単科大学令が出た一九二九年を広島大学の創立の年と考えることも可能なわけですから、この大学令という観点からの位置付けも、是非お考え頂けたらと思っています。

さらに申し添えますと、大阪大学とか名古屋大学というのは、かなり新しい大学で、阪大は確か医学部が一九三一年に、その後理・工学部が一九三三年に開学し、私が記憶する限りでは文科系の学部はなかったように思います。名古屋大学も医学部と工学部が一九三九年に、理学部ができたのは少し後（一九四二年）のことですね。私の専門の物理学の立場から申しますと、広島大学の物理学教室というのは全国で四番目に古いわけです。九州大学に理学部ができたのは一九四〇年ですし、農学部から出発した北大に理学部ができたのは一九三〇年です。その一年前の二九年には文理大の物理学教室が来ています。そんなわけですから、単科大学としては、大阪大学とか名古屋大学などに比べても古い歴史を持っているということがお分り頂けるのではないかと思います。

単科大学という出発点をどのように位置付けるかという問題に加えて、考えるべきもう一つの点は、これはもう十分お考えになっていることだと思いますけれども、新制大学の中で一九六八年頃から起こった、いわゆる大学紛争の問題です。そのことを広島大学としてどう受

け止めたかという問題は、大学の歴史にとって、ある意味で非常に重要な問題の一つかと思っています。

まあ、そういうわけで、日本の大学が総合大学としてではなく、単科大学から出発したという事実、そして五十年前にアメリカの大学制度に移行させられたにも関わらず、依然として旧来のヨーロッパの学部制を固持してきたところに、新制大学の宿命を感じざるを得ないということを上げたい。その結果、いわゆる学部の独立性というか、つまり有機的な関係ではなくて、むしろ独立した旧制の学部と旧制高校との集合体という形で出発をしたことが、ユニバーシティというよりはマルチバーシティというべきであろうと思っております。要するに大衆化した新制大学本来の学部教育、いわゆるアンダーグラデュエイトの教育を適切に位置付けられなかったところに問題を残したように思われます。これが学部の位置付けと同時に、大学院大学としての将来の重要な課題の一つかもしれません。

## 二、大学図書館の機能

大学図書館の機能については、これも歴史的なことを申して恐縮ですが、やはりギリシア時代に図書館が学問研究の中心であったこともよく知られています。その流れの中で大学図書館の使命は、文献資料の収集・整理・保管・閲覧さらにその場所を提供する学習図書館ですね。それから研究文献の検索という機能が入って、リサーチライブラリー（研究図書館）というのが欧米の大学のシンボリック存在で

あつたことも事実でございます。

日本の場合は、広島大学でも大差はないと思いますが、古い東京大学や京都大学を見ますと、やはり現在でもまだマルチパーシティの尾を引いて、学部の壁が非常に厚くなっています。東大では中央図書館のことを総合図書館と言っていますが、学部図書館とは全く独立にといいますか、「総合」という名前がついていますけれども、なかなか全学の図書館という実態にはほど遠いということを、いつも図書館長がこぼしておられました。図書館というものの位置付けは、やはり欧米とは全く違っています。残念ながら日本では、図書館は大学のシンボルどころではありません。特に中央図書館というのは、単にデポジット・ライブラリー（保存図書館）というような概念が非常に強かったと思います。少なくとも私が図書館に関係した時代には、そういう実情でございました。これ乗り越えるのは大変なことですけども、私はやはり五十年なり七十年なりの歴史を作る段階で、更に新世紀における情報化時代の大学図書館の本来のあり方を考えることは、極めて重要な課題ではなからうかという気が致します。

### 三、情報図書館の成立

第三の項目に移りまして情報図書館の成立ということですが、私が図書館長の仕事を与りました昭和五十年、一九七五年頃は、いわゆる情報検索ということが問題になり始めた頃でして、そういう問題がだいたい図書館自体としても緊急の課題になっている時代でございました。

その頃の図書館の全国的な集まりには、国立大学図書館協議会というのがありまして、その協議会で役員を選挙するわけです。各館からまずその地方地方で理事館というのを選びまして、その理事館の中から常任理事館を選ぶわけですね。私も三年間その常任理事に選ばれましたが、常任理事というのは七人おりまして、常任理事館として七館あるのです。いわゆる旧帝大が七つあるわけですが、選挙なものですから、七館の中に旧帝大が全部入るとは限りませんが、広島大学と東京工業大学、二年後は後者の代わりに、確か一橋大学が入っていたと思います。それが東京大学の図書館長室で二、三ヶ月おきぐらいに常任理事会を開いておりまして、そこで情報図書館というのを将来の図書館としてどう考えるか、という問題が随分議論になりました。実は情報検索を進めるためには、どうしても計算機を導入しなければならぬということ、喧々諤々の議論を致しました。ただ、この会には文部省の方は入っておりません。館長と事務部長達の会でございました。その時の文部省の見解としても、当時の情勢からして、大学図書館としては計算機を導入して新しい情報図書館というものを作り上げるべきであるということでした。

その当時の東大の図書館長は経済学部の安藤良雄教授でした。京都大学の館長は法学部の林良平教授で、東北大学の館長は工学部の和田教授でした。皆さんご存知のように、とにかく何か新しい事業が実施されるといふことになる、文部省ではまず東大から始めるわけですね。それで東大から京大に、それから東北大へという、古い大学からの順序ですべて決まっているわけです。ところが、東大の館長も京大

の館長も法経の方だったものですから、計算機については、もう見るだけで身の毛がよだつ、とおっしゃっておられました。それですから、文部省としては、まず東大が手を挙げてくれれば東大につけたいというつもりだったろうと思えますけれども、そういう方々が反対意見を出されるわけですね。それから東北大学の館長は工学部の方でしたが、当時の大学図書館職員では、機械化の実施が不可能であると判断されたように思われました。それで、紀伊国屋のJICSTという文献検索サービスがありました、それを利用していいのではないかとという意見でございました。東大なり京大なり東北大のような古い大学の館長がそういう意見を出されたものですから、機械化に積極的であった広島大学にその順番がまわってきたわけです。こういうことは今後もあり得ないこともかもしれませんが、ある意味では漁夫の利を得たということでしょうか。

しかし、それには非常に重要な背景があると思います。私が館長の時の事務部長は藤田善一という方でした。この方は図書館に非常に精通しておられる方で、将来の図書館の在り方としては機械化が必然的なものであるということで、館員の人たちに私が館長になる一、二年前から、機械化に関する勉強会を進めておりました。このことは銘記すべきことで、広島大学として一つの基盤をその時にすでに持っていたのです。したがって、機械化の話が出たときに藤田部長は、ぜひ広島大学としてイエスと言って下さいということでしたし、私も当然のことだと思っておりましたから、そこでお引き受けしたという次第です。ただ、ここでもう一つ注目すべきことは、どうして東大や京大がそ

れを拒否されたかということで、もちろん館長ご自身が計算機にあまり精通しておられなかったということもありましたけれども、第二の点は、東大の図書館も京大の図書館も、大学紛争の尾を引いていた頃で、同時に職員組合の活動の中心でもあったわけですね。ですから、館員の人達が職務の加重と人員整理につながる機械化反対の立場をとっていたわけです。ところが今申しましたように、広島大学では館員の人達がむしろ進んでそれを勉強し始めていたということが、非常に大きな契機になったということを今でも心強く感じております。

藤田部長は、広島に着任される前には、東大の総務課長をしておられたんですが、ずいぶんいろいろな苦勞をしたということを聞かされました。ところが、幸いにして私が館長を勤めていました時には、そういう苦勞は全くなく、むしろ館員の人達が非常に大きな支えになったことを今でも実感しております。全国の協議会の常任理事会を開きますと、まず初めの間は、東大での図書館員との団交がどうであったとか、京大ではこうだったなどと団交の話ばかりされるんですね。それもこれもその当時としては深刻な問題でしたが、いったい協議会本来の全国的な話はどうなっているのかと言いたくなるぐらい、そういう話が続いたわけです。今日では、広島大学は常任理事館には入っておらず、旧帝大だけでやっておられるようですが、私の時代でも、実は旧帝大で別に会を持っていたようです。私は、国立大学図書館協議会というのがあるのに、旧帝大だけに限定される議論は問題ではないかと強く主張致しました。その後は当然のことですが、皆さんに全国の図書館協議会というものを尊重してもらいましたけれども、後には

また常任理事館が旧帝大だけになってしまつて、なかなかそこへ声を発することが難しくなつたということを聞いております。

とにかく広島大学の場合には、少なくとも図書館に関する限り、紛争対策といったことは一切ございませんでした。これは部長さんの努力によるし、人柄にもよつたと思ひますけれども、私は一度も団交ということを経験したことがございませんでした。ただ一度女子職員の人達が、子供さんを預かる部屋をですね、託児室か何かというのを作つてほしいと言つて、二、三人来られてですね、和やかに話を致しまして、それを作ることになつたと記憶しております。

なお、国立大学として、最初に計算機を導入し、文献検索活動を始めたものだから、全国の大学図書館の関係者にとどまらず、いろいろな方面の見学者も多かつたために、図書館として、とくに臨時の説明係をもうけた程でした。

一方、現在の学術情報センターですね。この提案も実はその常任理事会で致しました。それから何年かたつて現在の学情センターが出来たわけです。そういうことがありまして、実は一九七六年に私の専門の国際会議がバークレイであつた時だつたかと思ひますが、その時ちょうど図書館に関係していたのですから、ついでにアメリカにおける図書館の実情を調べてほしいということがございました。それで私も非常にいい機会を得ましたので、一週間か二週間か忘れなければいけません。あちこちの大学をまわつて参りました。その際、プリンストン大学のプラズマ研究所での情報検索を見学しました。その時期にプリンストン大学ではやつと文献検索ができるようになったといつて、自慢

げに見せてくれたわけです。私の文献も出てきますとか言つて、ちゃんと出してくれました。その時点でようやく、アメリカでは文献検索というものが出発した段階だつたようです。それを見まして、私もこの段階であれば、日本でもそんなに追いつけないという状況ではなからうという自信を得て帰つてきた次第でした。

もう一つ重要なことを申し上げますと、その時期に図書館の情報化、機械化に関しては、当時の計算センターの人達が図書館に非常に協力的でございました。これもやはり特筆すべきことであつたと思ひます。以前に職員組合の理学部支部長をしていた時に知り合つた、数学の池田秀人さんという方が情報センターに移つていまして、図書館の電算化にはずいぶんいろいろな援助をしてくれました。図書館が計算センターとこれほど密接にやつていたところは、国立大学図書館協議会の常任理事会の話し合ひでも、他に例がございませんでした。

そういうことがありまして、情報検索をさらに進めるための研究班を作ろうということになつて、それに対する文部省の科学研究費の申請を致しました。試験研究とはいえ図書館として文部省の科学研究費を得たというのは、これも国立大学として最初の出来事でございます。またこれは総合情報処理センターのできる前でしたが、昭和五十二年と五十三年度の二年間で千二百万円ぐらいの研究費を頂きました。その成果は「汎用文献検索システムの実用化に関する研究」として、その後まとめて報告書として出版されております。この際に開発されたのが、いわゆる汎用文献検索システムです。Hiroshima University New Document Retrieval and Dissemination system という内容の

頭文字を取りまして、H・U・N・D・R・E・DつまりHundred Systemと名付けられました。これに基づいて科研費による研究をさせて頂いたわけですが、この時には、もちろん計算センターの人達と図書館職員の人達にも、共同研究の分担者あるいは協力者として多数参加して頂きました。

#### 四、総合情報処理センターの開設(省令化)

そのうちに情報処理センター、つまり昔の計算センターに関して、大型計算機センターという問題が全国的に出てきました。それで各地区の旧帝大がみな大型計算機センターというのを開いたわけです。広島も、中・四国のセンターとして大型センターの中に入れてもらいたいというので、その時の計算センター長の山本純恭教授に誘われて、一緒に九大などに参りました。しかし、いろいろな過程がございまして、結果的には、大型計算機センターを広島に設置することが見送られたわけでございます。やむを得ませんから、それならば改めて独自に総合情報処理センターというのを作つたらどうかという案が出まして、それでこれを推進する気運になったわけでございます。総合というのはどういう意味かと申しますと、研究用の技術計算、情報処理教育、さらに図書館の機械化や学術情報サービス、そして最後に管理事務の処理——これは事務系の処理で、当然今ではどこの部局でもやっておられるわけですけども——、その四つの分野を含めて総合情報処理センターという形で申請することになり、それが申請の二年後

(一九八一年)に省令で認められたわけです。

私は図書館長の任期を三年で辞めさせて頂きました。これは私的なことで恐縮ですけども、過労が原因だとかいわれましたが、任期の前に網膜剝離という大変な眼の病気にかかりまして、それでもなんとか三年の任期は全うさせて頂きました。総合情報処理センターというのが省令化されたのはその三年後のことです。これも実は国立大学としては全国で最初でした。その後、筑波大学とか、いわゆる新制大学にも設置され、今では単科大学を除く全国の国立大学に及んでいるのではないかと思います。

図書館長退任後、再びこのセンターに初代のセンター長として関係することになりました。総合情報処理センターでは、前にも申し上げたように四つの分野、すなわち図書館に関しては図書館の機械化による学術情報サービスということで、図書館の職員にも当然ながら参加して頂きました。それから情報処理教育の方では当時総合科学部の正方地孝雄助教(現センター長)、後に一般情報処理教育専門委員会専門委員長の樹下行三総合科学部教授、そして他の二部門の委員長を加えて委員長会議を毎月開くことによつて、全体の活動をより円滑にするという方向で運営されたわけでございます。その時にもやはり図書館の機械化ということが問題の中心であったことは事実です。しかし管理事務処理にも、総合情報処理センターの人達が、ずいぶん貢献したのを記憶しております。

ただここで問題になりましたのが、広島大学としては科学研究費で計算機使用の費用を払うことができなかったことです。これは非常に

残念なことで、四人の委員長の方々とも十分話し合いました。中でも新制学部に属する方のおっしゃるには、旧制の大学では科研費をもらっている方が多数であり、それを使うことが当然であるけれども、広島大学では必ずしも全学部の多くの方が科研費をもらっているわけではないので、それは不公平だという意見ですね。私もこれが公平であるかどうか多少疑問を感じましたけれども、まあ、大方の意見ならば止むをえないということになりました。理学部では科研費をもらっている方も多かったのですが、それが使えませんでしたので、講座費をずいぶん使用してもらうことになりました。

## 五、将来の課題

最後に将来の課題ですが、この情報化社会における大学図書館の役割という点では、世界の動向というのを眺めて見ますと、セルン(CERN)——ヨーロッパ合同原子核研究機構——というのがスイスのジュネーブにあります。これはアメリカに対抗するためにヨーロッパ全体で原子核ないし素粒子の研究をやる所です。ここで行われている実験結果は、本来完全に公開すべきものであるというのですね。理論家にしても、自然科学ですから当然実験結果を集める必要がございます。ところでそのセルンの研究所は、それこそ世界の実験データをどのようにして集め、またどのように利用してもらえるかを開発するセンターの役割も担うようになりました。現在ワールド・ワイド・ウェブ(World Wide Web)というのがありますが、インターネット

上で情報を公開するそのメカニズムがここで構築されたといわれています。それで今日では、例えばユニックスのようなマシン・インディペンデント・システムを利用して、全世界の人達が相互に情報を利用できる環境ができていますね。

情報図書館と総合情報処理センターの位置付けという問題は、情報化社会においては非常に重要な課題であります。ですから、この五十年の段階を契機に次の段階で、図書館と総合情報処理センターを、将来の情報化社会に先駆けて再構築できるかということが、これからの問題です。それに関連して学内の方々のご意見も時々伺っておりますけれども、この際、抜本的な改革を期待している次第です。

これに関して、皆さんもご存知のように、ポールディングという人が「二十世紀の意味」という書物を書いており、その訳が岩波新書の一つに出ておりますね。この書物では、要するに、かつての産業革命は、第一次の農業革命と、それに続く機械化への転換を工業革命と位置付け、その延長上に横たわる危機的問題を踏まえて、二十世紀をその転換の時代と考えているようです。

当時この著者がアメリカのボルダーにあるコロラド大学におられるということでしたから、ちょうどその大学で国際会議がありました時に、この教授を訪ねてみようかと考えたのです。それで実際にその内容の中で幾つか疑問の点(たとえば科学技術の発展の連続性の仮定など)をもう少し立ち入って伺いたいと思って、学長室を訪ねました。秘書室では突然の来訪者である私に非常に親切に情報を提供してくれました。ところがポールディングは私が訪ねた前の年に亡くなったと



いうことで、秘書がポールディングの思想や評価その他についての文献をいろいろ集めてくれて、それを頂いて参りました。そんなことは日本ではどの程度できるのか、ちよつと想像できないですけれども、その秘書の行き届いた情報収集のおかげで、ポールディングの仕事のことをいろいろ追憶できた次第でございます。

科学技術の視点からしますと、科学革命というのは第一次科学革命が十六世紀から十七世紀にかけて、また二十世紀前半には第二次科学革命が起こったというように私は位置付けております。いつでも科学革命の後で産業革命というのが起こっているわけですね。第一次産業革命は、そういう意味で機械化の時代に、ラダイトという人が機械化による一般の失業問題が深刻であるというので、機械化の反対運動をやったわけですね。これをラダイト運動と呼んでいるようです。かつて図書館の情報化、機械化を行う時にも、図書館の人達にすれば、計算機の導入が人員整理につながるんじゃないかという発想から、反対をしたということを前に申し上げました。私はそういう意味で、第二次産業革命として、現在の情報化革命の中でいろいろな社会問題を引き起こしていることが、ちよつとそのラダイト運動の段階とある意味で類似しているのではないかと思われまふ。現在ではさらに進んだ段階で情報化革命の新しい課題が山積していると云えまふしよう。

最後に一言だけ付け加えさせて頂きますと、図書館情報大学におりました時に、図書館の職員の全国大会がございまして、その時に何か話をしろということがありましたので、私はこういう話を致しました。情報ということに関してですけれども、情報にはよく知られているよ

うに一次情報とか二次情報というのがございますね。一次情報というのは文献そのもの、二次情報はそれを要約して、皆さんに広く提供するということです。私がその時に申しましたのは、ちよつと物理学からの類推ですが、0 (ゼロ) 次情報ですね。この0次情報というのは何かといいますと、文献になる以前の人間の対話です。これが研究の発端にかかわるアイデアを生む非常に重要な情報の起点になるのではないかということで、私はそのことを0次情報と位置付け、その重要性の話をしたのです。これは物理学から言いますと、0次近似というのがありまして、一次近似、二次近似と近似を逐次進めて行くのです。それから類推をして、私は0次情報ということを申したのですが、それから三年後に、著者の職業は分かりませんが、「0次情報の重要性」に関する本が出されているんですね。ある方からそれを知らされて、どういう意味で0次情報という言葉を使ったのかを確かめたいと思つたのですが、その文献が入手できなかったこともあつて、そのまま致した次第です。あるいは図書館にその書物がありましたら、ちよつと拝借して、その内容を確かめたいと思つておりますので、よろしく願ひ致します。<sup>(注)</sup>

そういうようなことで、いろいろ言い足りないことが沢山ございませけれども、とりあえずこれで一応私の話を終らせて頂きます。ご清聴どうもありがとうございます。

注

後で調べて頂いたところでは、次の書物が出版されていることは分りま

したが、書物の内容を見ることはできませんでした。

坂本樹徳「0次情報でニューメディア時代を読む（二十一世紀へのカギをにぎる五十一項）」大和出版（一九八六年）。

（なるみ はじめ・広島大学名誉教授）

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第六回研究会（一九九九年七月一日）において行われた講演を文章化したものです。広島大学における情報化への取り組みについての貴重な内容であり、あらためて鳴海元氏に感謝します。

（広島大学五十年史編集室）